

トップに聞く

日曜リレーインタビュー ⑥

「交通」をキーワードで地方の公共交通の計画策定や観光振興、地域活性化のコンサルタント業務をしている株式会社バイタルリード（出雲市荻野町）。過疎地域の公共交通計画策定では知名度、実績とも全国トップ級だ。廃線したJR三江線の沿線地域の住民が引き続き豊かに暮らせる交通網の策定支援も担った。「元気な社会を創る技術と感動サービスの提供」を目指す森山昌幸代表取締役社長（57）に話を聞いた。

（聞き手は本社編集部記者・湊孝典）

株式会社バイタルリード代表取締役社長

森山昌幸さん（57）



もりやま・まさゆき一県中小企業家同友会副代表理事（出雲支部長）。公益社団法人・日本都市計画学会・中国四国支部理事。幕末の志士、坂本龍馬の大ファンで人はどう動こうと自分は信じた道を進む一が信条。趣味は月1回程度のロードバイク。「自転車でもまだ見ぬ出雲の魅力を再発見したい」

A 1998年に有限会社森山地域計画研究所として設立し、2005年に現社名に変更しました。「海外で通用する社名に」と米国人のネイティブスピーカーにも相談しました。活性化を意味する「バイタルリジョン」をリードするという「バイタルリード」です。世界に通用し、世の中を元気にしていきます。

Q 勝負所だと認識しています。

Q 会社の方向性をどう考えていますか。

A 当社の交通計画のコンサル技術を身に着けたトップ社員は全国どこでも通用します。社業ではヘッドハントもあります。社業ではコンサル業務が強い一方で、システム部門は比較的弱かったため、近年は大学と共同開発で高齢者の事故を減らすためのシステム開発をしている優秀な中途社員を積極採用して強化しています。

時代を切り拓くコンサルに

Q 社業の現状をどう見えていますか。
A 当社は建設コンサルタントですが、主たる業務は行政の公共交通計画策定です。中国地方では受注していない自治体を数える方が早いほどです。大規模な鉄道やモノレールがある都市部でなく、生活の足となるバス再編問題など衰退する地方の交通計画策定に強みを持っています。急速な過疎化など現状が刻々と変わっていきバス事業など地域の足が成り立たなくなっている中、5年単位で当初の計画は見直す必要が生まれています。当面は忙しいと思

ますが、車の自動運転技術などのIT技術が交通の仕組みを変えています。海外ではウェブ利用の自動運転車サービス「ウーバー」も出てきました。おそらく10年後には交通の概念自体が大幅に変わるのでは、と踏んでいます。

Q JR三江線沿線地域の公共交通網計画の策定もされましたね。
A 三江線では島根県から委託を受け、広島県と沿線自治体と一緒に策

定しました。基本は区間ごとに幹線路線バスで代替し、地域内のフィーダー（枝葉）路線に接続しました。しかし人口減社会においては、バス利用自体もやはり厳しい状況です。地域住民の利便性をどう確保していくかや、廃線前に来た観光客が、再訪したくなるような地域に根差した仕掛けづくりが大切です。江の川沿いの景観は出雲とは異なる独特な魅力がありますからね。

交通手段が変わると新たな魅力も見えてきます。島根県は車社会ですが、休日には日ごろ使う車から離れ、勉強がてら子どもとバス移動するような意識を作ることも大切です。出雲にも車窓から美しい田園風景が楽しめる一畑電車があります。便利に短時間で移動することだけが時間の過ごし方ではありません。移動時間そのものの価値をどう大事にするのが大切です。人気で予約が難しい豪華寝台列車「瑞風」は、まさにその代表例ですね。

Q パワーや勢いを感じる社名には、どんな思いを込めましたか。
A 1998年に有限会社森山地域計画研究所として設立し、2005年に現社名に変更しました。「海外で通用する社名に」と米国人のネイティブスピーカーにも相談しました。活性化を意味する「バイタルリジョン」をリードするという「バイタルリード」です。世界に通用し、世の中を元気にしていきます。

IT技術など時代の变化は急速です。3年前には車の自動運転や技術進展による「ライドシェア（自家用車による有償送迎、相乗り）」や人工知能（AI）はまだ先の感覚でしたが、今や現実です。私たちの業務でもバーチャルリアリティ（VR、仮想現実）を使った調査が実際にあります。技術革新が進んで10年後には今の当社がこなしている業務は消失している可能性もありですが、社員が優秀なので時々で仕事を引出し、忙しくしているはずで、様々な変化に対応し、好機を生かした10年後に会社をさらに発展させるには、この3年間

出雲の会社ですが業界トップレベルの技術を持つ人が「大手ではなくバイタル社に行きたい」と言ってもらえる最先端の技術と最高のサービスを提供できる会社を目指します。